HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	価値形態論および貨幣生成論理への再考 ： 宇野経済学における「形態的な同質性」の論理に基づいて［論文内容及び審査の要旨］
Author(s)	You, Xinwei
Degree Grantor	北海道大学
Degree Name	博士(経済学)
Dissertation Number	甲第14615号
Issue Date	2021-06-30
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/82638
Rights(URL)	https://creativecommons.org/licenses/by/4.0/
Type	doctoral thesis
File Information	You_Xinwei_review.pdf, 審査の要旨

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

学位論文審査の要旨

博士の専攻分野の名称：博士（経済学）　　氏名：尤　歆惟

審査委員
主査　准教授　斉藤　尚
副査　教授　橋本　努
副査　講師　柴崎慎也（北星学園大学）
副査　名誉教授　岡部洋實

学位論文題名

価値形態論および貨幣生成論理への再考

―宇野経済学における「形態的な同質性」の論理に基づいて―

本論文は，いわゆるマルクス経済学・経済学原理の「価値形態論」の中の，貨幣の必然性に連なる，商品価値の内在性について検討したものである。本論文の特徴は，第二次大戦後，マルクスの経済学体系を批判的かつ独自に発展させた宇野弘蔵を継承する近年の研究動向に焦点を当て，未だに残る価値形態論の論理的問題点の解決を試みたことにある。論文の要旨は，次の通りである。

「序論」および第１章「問題の所在」では，宇野の価値形態論にみられる二つの特徴が検討されている。（１）「価値実体＝投下労働」というマルクスの命題を捨て，商品交換だけからなる流通形態において価値を考察した点，（２）主体となる商品所有者の欲望と行動に着目し，価値を，「形態的な同質性」として規定した点である。しかし，本論文は，宇野の規定は，価値実体から切り離されているため，現象世界での把握に留まり，価値の内在性を明確にしてはいないとする。これについて宇野を継承する学派（以下，「宇野経済学」）による近年の主要な議論は，次の二つである。山口重克に代表される論者は，宇野のいう同質性をマルクスの「実体的な同質性」の残滓とし，価値を「交換性」と規定する。他方，小幡道昭に代表される論者は，商品を先ず「予備的富」として捉え，価値を，交換性に融合しえない内在性とする。本論文は，小幡等を支持しつつも，彼らの論理は「富」を商品所有者の交換行動の外部から規定するに留まっていると批判する。

第２章「価値形態論の端緒にある価値関係の導出について」は，小幡等の難点の克服のための第一として，商品所有者の行動の内にある価値関係の生成根拠を明らかにする。ここでは，宇野が価値形態・第一形態（簡単な価値形態）で提示した商品所有者の交換要請を取り上げ，商品所有者の欲求関係と価値関係の相違と関連性とが検討されている。第二の克服法を検討する第３章「一般的等価物の生成原理の再考」は，商品所有者の行動に即して，価値形態の展開（第一形態から第二形態《拡大された価値形態》へ，そして第三形態《一般的価値形態》へ），および，それに

よる一般的等価物の生成を解明する。ここでは，間接的な欲望対象となる商品に要請される「富」の性格，そして，一般的等価物となる商品に要請される材質の特性が，商品所有者の行動の内に理解するという方法に基づいて検討されている。第２～３章は，商品所有者の交換行動という「行動論」のビジョンにおいて価値の内在性と価値関係の実現とを理解する試みであり，近年の価値形態論・貨幣生成論に対する批判的な研究として位置付けられる。

第４章「商品の物体性と『価値=同質性』論理の実現のメカニズム」は，商品交換が商品という外的な対象を媒介とする人間行動である以上，価値関係の実現は，貨幣という外的な対象に担われざるをえないことが示される。商品の物体性が価値関係の実現にとって重要な役割を果たすこと，内在性としての商品価値は物体が有する客観的性質として，そして同質性の関係として現われることが示されている。この同質性を根拠として，商品の交換比率は安定的な関係，および，同種商品の交換は同一の単位でもって評価されるという特性をもつ。同質性という価値の規定は，商品所有者の交換行動を通じた価値関係の発生と実現の検討（第２～３章）が，商品の物体性という視角（第４章）から補足されることで確実なものとなる。

「結論」では，以上のまとめとともに，本論文が商品経済の顛倒的な性格を明らかにしうる可能性を含むことに言及して，将来の研究課題が提示されている。

本論文は，宇野経済学の価値形態論をめぐる山口等と小幡等との論争に着目し，後者を支持しつつも，その論証論理を批判的に検討したものである。そして，山口の「行動論」アプローチを，小幡による間接交換の論理の難点を克服する方法として再評価したものでもある。精緻に，しかも折衷的ではない独自の論理構成が追究されている点において，価値形態論の新たな試みとして高く評価されうる。

もっとも，近年の議論に焦点を当てすぎたために，宇野経済学全般やそれ以外のマルクス経済学における研究蓄積の検討が必ずしも十分ではないこと，自らの積極説の提示に際して論理の錯綜がみられること，先行研究を通じて蓄積されてきた概念や用語の意味を十分に踏まえているとはいいがたい箇所があることなど，今後の課題とすべき点は残されている。

しかし，宇野を端緒とする商品所有者の交換行動に即した価値形態論の構成方法をさらに徹底させ，商品所有者の交換行動が他人の欲望対象までをも包含しうることを明らかにし，価値形態から「貨幣の必然性」への論理の精緻化を追究した点の貢献は大きい。このことから，審査委員は全員一致して，本論文は博士（経済学）学位に値する業績であると認める。